

飛鳥 ASUKA KAWARABAN
かわら版

2024年
6月

初夏号

第214号

発行所 株式会社 飛鳥 出版室
発行人 永野 正将
ADD: 〒780-0945 高知市本宮町65-6
TEL: 088-850-0588
MAIL: info@asuka-net.jp



メダカたちの
青空教室

表紙写真撮影（飛鳥のめだか鉢）：株式会社 飛鳥

もくじ

日本からの眺め④	氏原名美	02
新聞余話②④	大澤重人	03
おのころじま奮染記 32	田島征彦	04
幸せに生きるための作文ドリル	久松由理	05

観た方がいいよ「平成ガメラ 3部作」	06
広告	07
さもないこと⑤	永野雅子 08
飛鳥のお花見	

日本からの眺め④

キルギス、中央アジア、ユーラシア

氏原名美

スピーチに

感じる違和感

～日本語弁論大会の今昔～

毎年五月、中央アジア日本語弁論大会が開催される。コロナ禍で二〇二〇年は中止となったが、中央アジア五カ国の代表が集う国際イベントで、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスの三か国の日本語教師会が持ち回りで主催する。

各国代表は、日頃感じている疑問、異文化体験、将来の夢、社会への提言など、自由なテーマで学習言語である日本語でスピーチをするのだが、毎回、ほとんど身じろぎせず淡々と聴衆に語りかけるキルギスとかザフスタンの代表に対し、ウズベキスタンのトルクメニスタンは、そしてタジキスタンの代表は、スピーチを演じてみせる。歌うような語り口で身振り手振りを駆使して観客に訴える。キルギスを離れてからは専らオンラインやオンデマンドでの視聴だが、

シルクロードの多様性が十分に感じられて面白い。

今年、第二十七回大会はウズベキスタン国立タシケント東洋学大会を会場に開催され、各国代表合わせて十七人が出場した、優勝は昨年に続きウズベキスタン、キルギスは四位と六位に入賞した。

キルギスの国内大会は四月の半ばだった。初級部門と中上級部門の二部制で、日本語での質疑応答もある中央アジア大会代表選考会を兼ねた中上級部門には、今年是三都市九機関から主に大学一年生と二年生を中心に高校生四人を含む十四人がエントリーし代表には四人が選ばれた。中等教育における日本語教育の充実と、出場者の日本語レベルがアップしていることがよくわかる大会だった。

しかし、何か物足りない。最近ではスピーチを聞いていても弁論大会という気がしない。まるで作文朗読会だ。かつては、日本センターの日本語コースで学ぶ社会人や、大学が五年制だったころの大学上級学年の学生など、年長の学習者が批判精神に富んだスピーチを披露してくれたものだが、コロナを挟んだここ数年、社会の矛盾に

目を向けるスピーチより個人的な幸せ体験ばかり聞かされている気がする。

それでも、ビシケクを中心とする北部と比べ、相対的にまだまだ貧しく家族のあり方も伝統重視の傾向が強いオシユ地方など南部の学生のスピーチには、因習に縛られがちのコミユニティーに対して意識改革を訴えるものが少なくなかったのだが、今年の国内大会では地域差は全く感じられなかった。

日本センターも大学もほとんど授業料が高くなり、国立大学の奨学生枠がほとんどなくなっているため、子どもを大学にやるのは無論のこと、センターや民間のランゲージ・スクールで日本語を学ばせたりすることなど、ある程度経済力のある家庭でなければ難しい。総じて家計に余裕がなく、通学のバス代も昼食代も節約せざるを得なかった二十年前の学生と、豊かさに慣れた今の学生とでは、問題意識も幸せ感も異なっている。一方で、大学に進学するのが当然という階層と家族を養うためには出稼ぎせざるを得ない階層へと、若い世代が二極化しているようにも思える。

医科大学二年生の女子は「結婚したら、姉妹みんなで力を合わせて夫の親も自分の親もお世話するつもりです」とジェンダーギャップには目もくれず、「キルギスを出るな、老後はお前にしか頼れないのだから」と親に言われて日本留学を諦めた工科大学に学ぶ男子学生は「親の面倒を見るのは子どもの義務だから仕方がない」と自分を納得させ、歴史学を専攻する三年生女子は「夢は、かしい母親になって国に貢献できる元気でたくましい子供たちを育てることです」と誇らしげに宣言する。

いずれの決意表明にも目眩を覚えたが、為政者からすれば、現状に満足し変革を求めず、親や国家への奉仕を自明のこととし政治の怠慢や制度の不備に無頓着な国民は、実に心強い存在に違いない。

氏原 名美

うじはら・なみ

ピンケク国立大学東洋国際関係学部特任教授。越知町出身。北海道大学卒。



ピンケク市街からアラトー山脈を望む(写真:Saijo Y.)



心に咲いたバラ

5月のある日。「高知新聞」のサイトを開いたのはたまたまでした。

見覚えのある母娘3人の写真が目飛び込んできます。「高知一のロマンチスト」と言われた男性の姿が傍らにありません。見出しを見て、

旅立ちを知りました。《亡き主人のバラ優雅に 香南市のイングリッシュガーデン》

2008年4月、新聞社の高知支局に赴任しました。着任早々、「近所のお医者さん」という連載のローテーションが回ってきます。取材のあてはありません。すがりついたのが、主催事業の書道展で名刺を交わした書家の塩瀬敦子さん（当時65歳）。本業が薬剤師で、ご主人が耳鼻咽喉科医でした。

連載の取材後、塩瀬さんと昼食をご一緒しました。気さくな話し好きの方で、書道の思い出

話を始めます。荒れた私立高校で教えていましたが、生徒に手こずらされ、やめたいと師匠だった大家、川崎白雲さん（故人）に相談します。師匠がポツリと言いました。「聞いてくれる生徒が一人でもいたらいいんじゃない。風が吹いても消えんからね。人の心に咲いた花は」

支局に戻ると、居ても立ってもいられずパソコンを開きました。「この話を独り占めにしては惜しい」。記憶を頼りに一心不乱に打ち込んだのが「心に咲いた花」というコラムです。「支局長からの手紙」として掲載すると、塩瀬さんから弾む声で電話がありました。雑談が記事になるとは思わず、友人たちに掲載紙を送ったそうです。

その一人が「高知一のロマンチスト」の男性です。「最近、バラ園の中で金婚式を開いたのよ」。すぐ香南市香我美町山北のミカン農家を訪ねます。安岡賢之さんは当時73歳。朴とつな声でドラマのような展開を振り返ります。

同い年の妻悦さんは北海道出身。青年会の全国大会でバスの席が偶然隣り合ったのです。意

気投合し、結婚を申し込むも「そんな遠くに嫁にやれない」。家族から猛反対されます。一度は諦めたものの、愛情の深さを知った仲間たちが手紙攻勢をかけ、家族も折れます。

南国に嫁いだ悦さんは、慣れないミカン栽培を支えます。賢之さんは感謝を込めて妻の大好きなバラを植え始め、カフェを兼ねた「イングリッシュガーデンハウス」をオープンさせます。娘の結婚式で、妻が漏らした一言を聞き逃しませんでした。「私のときはウエディングドレスを着られなかったのよ」。内緒でミッシェンを進めます。結婚50年の金婚式に花嫁衣装を着せ、バラ園で祝おうと。コラムの見出しは「君に贈る“金”のバラ」。

主催事業の毎日農業記録賞にも応募いただきました。金婚式の話も盛り込んだ「妻に感謝の農業人生」は最優秀賞に選ばれました。東京での表彰式後、仰天する話を聞きました。私が勤務する新聞社の社長に面会を申

し込み、高知の一支局長を宣伝してくださいと言うのです。ありがたいやら、冷や汗が出るやら。

賢之さん、享年88。実は塩瀬さんも高知離任直後に鬼籍に入られています。紹介したコラムは拙著『心に咲いた花―土佐からの手紙』（富山房インターナショナル）に収録されています。お二人と接した日々は、心の中でお咲いています。



コラムの後に掲載した金婚式のグラフ紙面（毎日新聞朝刊高知ブロック面2008年6月26日付）



大澤 重人

おおざわ・しげと

渡来人歴史館（大津市）
専門員、元毎日新聞高知支局長

『心に咲いた花』はアマゾンなどで入手できる他、オーテピアなどの図書館にもあります。

おのころじま の 奮 闘 記

ふんせんき

32.「なきむしせいとく」その3

田島 征彦

起承転結も決まっていらないのに、走り出した絵本制作でした。20場面の絵が染めあがり、テキストも、おおよそ完成しているのに、最後の場面ができていません。凄まじい戦争を生きのびた少年のことを、この絵本で読み進んでくれた子どもたちに、未来への感動を伝えなければなりません。そうでないと、戦争の恐ろしさを伝えただけの絵本で終わってしまいます。

れば、マスコミに取り上げられず。そのためには4月中に出版されていなければならぬ。印刷、製本の時間を考えれば、どうしても3月の初めには印刷所に入れなければなりません。突然、喜瀬武原基地闘争が浮かびました。何年か前、沖繩の歌手、海勢頭 豊さんから聞かされた基地闘争です。そうした米軍の理不尽な軍事演習より先に、せいとくたちは土地闘争を闘わねばなりません。敗戦で収容所から出てきた人たちが、農作物をつくり始めた時、機関銃とブルドーザーで基地を作るために、家を押しつぶされたり、焼き払われてしまうのです。その場面で絵本を終わることにしました。絶望的な場面でも、せいとくの言葉は違っています。

「いまはアメリカに、占領されています。でも、沖繩が日本にもどったら、こんなものはすぐに、ぼくたちの手でなくしてしまうさあ。だつて戦争の苦しみを、一番知っているのは、ぼくたちなんだから。」

復帰して50年経っても、基地はなくなるとどこか増えつづけています。強烈な風刺です。印刷されて、まだ製本もされていない絵本を持って、最後に沖繩を訪れました。

佐喜眞美術館の館長夫妻と、芸員の間かな恵さんの前で、絵本を朗読しますと、上間さんから鋭い言葉がありました。



「最後の場面ですが、へーこんなものはぼくたちの手で、すぐになくしてしまうさあ。」とある『ぼくたち』は、沖繩の人たちのことですね、沖繩の基地を無くすのは沖繩の人だけの力ですか？本土の人たちは関係ないですね」

苦労して完成した最後の場面です。自信満々でした。

しかし、ぼくには沖繩のことを自分の問題として考える姿勢がなかったのかと思うと、ただただ恥ずかしく思う気持ちで立ち尽くすばかりでした。



田島 征彦
たじま・ゆきひこ
染色家・絵本作家

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じくくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖繩の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖繩戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本「なきむしせいとく」が二〇一三年度の講談社絵本賞を受賞した他、国際的な評価を受けました。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

「幸せに生きるための作文ドリル」



アイデア国語教室 主宰 久松 由理

〈プロフィール〉

自分の頭で考え抜く子ども、自分の考えを言葉で表現できる子どもを育てるために、東京・三田校と高知校を拠点に新時代の国語学習法を実践。全国の名だたる難関校に続々と合格者を輩出している。

「国語塾」と聞くと、ひたすら読解問題を解く授業をイメージされる方が多いのではないのでしょうか？ 実は、私たち大人世代が経験してきた「読解問題を解く」という方法では、国語力を伸ばすことはできません。読解問題は、読み書き力を測るただのチェックシート。視力検査を何度受けても視力が改善しないのと同じで、どれだけチェックをしたところで読み書き力はアップしない

のです。

では、どうすれば国語力が伸びるのか？

それは、「読んで書く」を繰り返すこと。先人の智慧が詰まった良書を読めば読むほど、私たちは自分の偏見や思い込みに気付かされ、「正しいものの見方」を身につけることができます。さらに、自分に起きた出来事を言葉にすることで、客観的に自分の心を見つめ直すこともできるのです。

つまり、読んで書く、この行為を繰り返すことで「我（主観）」が取れていきます。私の強い人は人の言葉をまっすぐ受け取れず、文章を読んでも内容を正しく理解できませんが、我が強くない人は筆者の言うことが実に良く分かる。言葉が心に染み入って、人格まで変わってしまうような読書ができるのです。

「我を捨てる」とは、こうではないとだめ！ という自分の中の価値観を捨てることです。何事にも執着がなくなり常に幸せな心持ちでいられます。ですから、私は

一人でも多くの子ども達に「幸せに生きるための国語」を学んでほしいと考えています。

とはいえ、子ども達に主観を捨てさせ、客観的視点を身につけてもらうのは至難の技。子どもは感覚の世界に生きていますから、なかなか言葉で理解してもらおうのが難しいのです。そこで

思い付いたのが、名画鑑賞を楽しみながら客観的視座や創造性を手に入れるという作文ドリル！ モネやフェルメール、ゴッホといった世界の巨匠の視点を借りて、観る人の脳内「ものの見方」を大変革しちゃおうという作文教材です。

アートには、こう見なくちゃいけない、こう感じなくてはならない、という決まりが一切ありません。だからこそ、誰もが自由に自分の思いを表現できる最高の教材になるのです。また、名画を観察して作文するということ作業は、子どもの脳に良い影響を与えるだけでなく、高齢

者の認知機能向上にも役立つのではないかと思います。幅広い世代の皆様にも、このドリルを使って益々お幸せになっていただけると嬉しいです！



著書
●理論編
「国語の成績は観察力で必ず伸びる」
（かんき出版）
●実践編
「名画で学ぶ作文ドリル」（かんき出版）



子供の味方だけど「子供だまし」じゃない。

観た方がいいよ、

平成ガメラ 3部作

〔第1作〕ガメラ 大怪獣空中決戦 (1995年3月)

〔第2作〕ガメラ 2 レギオン襲来 (1996年7月)

〔第3作〕ガメラ 3 邪神覚醒 (1999年3月)

25年以上前の作品。しかしその面白さは色あせることなく、日本SF映画の最高峰、怪獣映画の金字塔と謳われ現在まで高く評価されている。また、3部作ながら各作品それぞれの物語・キャラクターがしっかり練りこまれており、それぞれ別作品として観ても十分に楽しめる作品に仕上がっている。

.....
大好きな映画である。リアルタイムで映画館で鑑賞。パンフレットは今でも手元に。レンタルビデオで何回も視聴した上に、結局DVDを購入。また何回も観た程である。最近Youtubeで『ガメラ2 レギオン襲来』が期間限定で無料配信されていたのを見つけ、ついつい最後



今でも手元にあるG2のパンフレット。

まで観てしまった。

.....
そんな経緯もあり、ここでは『ガメラ2 レギオン襲来』を紹介したい。宇宙生物レギオンが日本に襲来。それに敢然と立ち向かうガメラと自衛隊の壮絶な戦い。この絵空事感全開の物語は、序盤から丁寧に積み重ねられた説得力あるエピソードと、緻密な映像描写によって現実感溢れる物語として立ち上がっていく。自衛



隊全面協力での撮影も伊達じゃない。

個人的には、3部作の中で特に「ヒーロー」としてガメラが描かれているところがとても気に入っている。大怪獣ガメラは強力な必殺技も持っているしまっハ3で飛行することもできる。しかしレギオンは、そんなガメラをも圧倒する強大な組織力と戦闘力。序盤から最終戦までガメラは苦戦を強いられ、ずっとピンチである。いつもボロボロになりながら、時には敗北。しかし子供たちの祈りに応えて復活！最後の戦いに赴くその姿はまさにヒーロー。痺れる。最高のカッコ良さである。終盤に向けて、大迫力のバトルと人間側のドラマも見事にリンクして完結に向かって畳み掛ける。ホント拔群の見心え.....

特撮映画史上最高傑作の呼び声も高く、シリーズ最高傑作ともいわれる「ガメラ2 レギオン襲来」。
騙されたと思って、ご覧になっては
いかが。絶対、面白いから。

そして最後に。

「ガメラの敵には、なりたくないよね」
長文駄文失礼。

〈制作部：ふくどめ〉

〔余談〕

ちなみに、平成3部作の世界では亀という生物は存在しない設定になっており「亀」というワードは一切登場しない。そのため、劇中ではその風貌を表現するのに「亀のような姿」と呼ばれる事もなく、初めから最後まで不気味で巨大な生物であり続けている。

老いては孫に従う

永野 雅子

「おばあちゃん、安全運転でお願いなね」
助手席に乗った孫が必ず発することは。
それほどスピードを出しているつもりは
ないけれど、なんとなく不安なの
だろうか。皆でお墓参りに行くときは、
私の車には乗ってこない。

ある日、孫のお誕生日祝いに招かれ
て息子宅に行った夜、楽しく過ごして
帰った。

翌朝、会社に出かけようと車を見た
ら、なんと後部に高齢者マークのワッ
ペンが貼ってある。

「もうっ！」てつきり息子の仕事だと、
剥がして乗り込む。

年齢的にはまさしく高齢者なのだけ
れど、どうもあのマークには抵抗があ
って付けたくない。罰則規定はないよ
うなのでそのままにしていた。

会社に行くとき、嫁から、
「あれは小夏が買ってきて、車につけた
みたい。おばあちゃんを心配してく
とやろう」

そう言われればいやとは言えず、渋々
貼り付けた。息子に言われると（言い
方が悪い）ムツとして素直に従う気に

はなれないけれど、孫が私のためにお
小遣いで買ってきてくれたと思うと涙
が出そうになる。

また、大学生になった夏菜と散歩中に、
「この頃すぐに疲れて、思うように仕事
がはかどらん」と言うと、

「おばあちゃん、歩きゆう？毎日時間を
決めて運動をせんと。歳や言うて自分
に甘えよつたらいかんよ」

これを息子や嫁に言われたら頭に来
るけれど、孫の言葉と
なる

「そうやね。気をつけ
ます」という気になる
から不思議。



「老いては子に従え」と言うけれど、
我慢しながら従うとストレスになる。
同じ私を思って言ってくれることでも
言い方次第。もう少しソフトな言い方
はできないのと思ってしまう。その点
孫の言葉には抵抗感がない。
ひよっとしてこれは、私の子育て時
代の結果ですかね。



永野 雅子
ながの まさこ
株式会社 飛鳥 常務取締役
著書「わが家の太郎」

飛鳥のお花見

毎年恒例、飛鳥のお花見。だいぶ遅い報告と
なっていました。

今年も、大谷公園での開催となり、例年はい
つも散り終わりの少し寂しい桜の木の下での開
催でしたが、今年はまだ散り始め「木に花びら
が沢山残ってる」と感動しながら乾杯。

時折吹く心地のよい風に花びらが舞い、まさ
に桜吹雪。最高のロケーションの中、食べて飲
んで、社員同士の会話も弾みます。

この日の大谷公園は私たち飛鳥の社員以外に
もたくさんの方がお花見に来ており、散りゆ

く桜の下で
皆がそれぞ
れ最高のお
花見を満喫
しておりま
した。



「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援しています。

飛鳥かわら版 第214号【初夏号】 飛鳥出版室

●発行所：株式会社 飛鳥 ●発行人 永野 正将
●住所：〒780-0945 高知市本宮町65-6 ●電話：088-850-0588
●メール：info@asuka-net.jp ●ホームページ：https://www.asuka-net.jp